

雪の降った日

小川未明

青空文庫

雪ゆきが降りふりそうな寒さむい空そら合あいでした。日ひも射ささなければ、風かぜも吹ふかずに、灰はい色いろの雲くもが、林はやしの上うへにじつとしていました。葉はのついでいないけやきの細ほそい枝えだが煙けむって見みえるので、雲くもと木きの区く別べつがちよつとわからないのでありました。

「泣なき出だしそうな空そらね。」と、かよ子こちゃんがいきました。

「ほんとうだわ。私わたし、こんな日ひがきらいよ。」と、ふところ手でをした竹たけ子こさんも、いいました。男おとこの子こたちとはなれて、二人ふたりは、並ならんで空そらをながめていました。

「もつとなにか持もつておいでよ。火ひがなくなってしまうじやないか。」

重ちゃんしげの兄にいさんが、棒ぼうの先さきで、たき火びをつついていました。青い煙あおけむりが自分じぶんの方ほうへ流ながれるので、顔かおをしかめています。

年としちゃんは、走はしっていつて、どこからか米こめ俵たわらの空あいたのを下さげてきました。原はらに捨すててあつたとみえて、俵たわらは霜しもでぬれていました。

「待まった、待まった。そんなのをいれると、すぐ火ひが消きえてしまう。よくここで、乾かわかしてからでないとな。」と、ブリキ屋やのおじいさんがいいました。おじいさんは、自分じぶんで木きくずを拾ひろつてきました。このあいだまで大工だいこくたちが、ここで他所よそへ建たてる家いえの材ざい木もくを切きり込んでいたのでした。ここは、町裏まちうらの原はらっぱであります。まだ、お正しょうがつ月がつなので、子供こどもたちは、ここへきて、たこを上あ

げたり、羽根はねをついたりして遊あそんでいました。

「ごらんよ、女おんながあんなことをしている。乞食こじきなんだね。」と、先さきに気きのついた年としちやんが、いったので、たき火びにあたっているものが、みんなその方ほうを向むきました。一人ひとりの女おんなが、長ながいはしのようなもので、ごみ捨すて場ばをかき返かえして、落おちている菜なつ葉ばや、新聞紙んぶんしのようなものを地ちの上うえへひろげて、撰えり分わけていました。

「ああ、乞食こじきだね。」と、義よしちやんが、いいました。

「いや、乞食こじきじゃない。あちらに車くるまが置おいてある。」と、おじいさんが、いいました。なるほど、手車てぐるまが置おいてあつて、その車くるまの上うえにかかごが乗のっていました。

「なんなの、おじいさん。」

「そうだな。あれは、貧乏のくず屋さんだ。」

年ちゃんとしは、車くるまのそばに五つか六つの男の子おとこが、ぼんやりと立たっているのを見みました。その子供こどもは、くつ下したもはかずに、ぼろぐつをはいていました。そして、母親ははおやのところへはいこうとせず
に、空そらに舞まっていたとびを見みているようであります。

「なにをさがしているんだろうか。」

「あれは、紙かみや、金かなくずや、こわれたびんのようなものを撰えり分わけているのさ。」

「あんな菜なつ葉ばも、持もって行くのかしらん。」

「きつと、家いえへ持もっていつて食たべるんだよ。」

「汚きたないなあ。」

「おじいさん、あんなごみなんかお金になるの。」と、年としちゃん
が、ききました。

「いま、鉄てつくずでも、紙かみくずでも、値ねになるのだよ。あの紙かみは、
またすき直なおして、おまえたちの使つかっているような鼻紙はながみや、もつ
とりっぱな紙かみになるのだし、鉄てつくずは、溶とかして、またいい鉄てつ
になるのだ。」と、おじいさんは、答こたえました。

重しげちゃんは、石いしを拾ひろつて、女おんなの方ほうへ向むかって投なげようとしたの
を、兄にいさんが、

「およしよ。そんなことをして、あぶないじゃないか。」といっ
て、しかりました。

「ねえ、おじいさん、あんなくず屋やが、くつなんかをかつぱらう

のだろう。人が見ていないとねえ。」と、重ちゃんがいいました。「そういうことをする悪いものもいるが、そんなことをしない、いい人もたくさんある。」と、おじいさんは、さっきのぬれた俵たわらが、もう燃えそうになったので、お話はなしよりもそのほうに気を取らとれていました。俵が燃えはじめると、おじいさんは脊中せなかをあたためたり、前まえの方ほうをあぶつたり、体からだをぐるぐるといろいろにまわして、すこしでもよく暖あたたまろうとしていました。

「あんな菜なつ葉ばをみんなかごの中なかへ入いれてしまったよ。きつと、家いえへいって洗あらって食たべるのだね。」

年としちゃんとは、そんな生せい活かつをするものをさげすむようにいいました。小ちいさな子こ供どもは、母は親おやが、車くるまのところへもどつてきたので、

喜んで飛び上がっていました。年ちゃんは、きつと子供が、おま
 えはここに待っておいでといわれたので、母親のそばへいけず
 に長い間、車のあるところに立たされていたのだと思いました。
 「そうすると、かわいそうだな。」と、心の中で、思っていると、
 「おまえたちは、みんな、まだ困った人のことは、わからないだ
 ろうからな。」と、おじいさんが、いいました。

「雪や、こんこん、あられや、こんこん、降っておくれ。」
 「雪が降ってきたわ。」

かよ子ちゃんと、竹子さんが、かけ出しました。

「さあ、お家へ入ろう。」と、おじいさんが、まずたき火のそば
 からはなれると、重ちゃんの兄さんが、つづいて去り、みんなが

ばらばらになって、お家の方へ走り出しました。はや、原っぱの上は白くなっていました。

「とし、年ちゃん、晩に、お母さんや、お姉さんと、かるたをとっていました。」

「きよがいると、おもしろいのだがなあ。」と、思いました。女よちゆう中ちゆうのきよは、母親が病気で田舎へ帰ったのです。

「お母さん、きよは、いつくるの？」

「母親がよくならなければわかりませんね。あの子も、かわいいそうです。いろいろ心配して。」と、お母さんは、おっしやいしました。

このあいだは、弟に、送ってやる為替を手紙といっしよに落と

したのです。その後、ご母親がははおや病氣びょうきという知らせがきたので、
きよは、おどろ驚いて田舎いなかへたつたのでした。

しかし、こちらへきてから二年ねんの間に、あいだ自分の力ちからでこしらえた
着物きものや、はおり羽織をきて、きちんとして帰かえっていくときのようすは、
はじめて田舎いなかから、行李こうりを負おつてきたときの姿すがたとは、まったく別べ
つじん 人のようでありましたので、

「どこのお嬢じょうさんかと思おもわれますよ。」と、お母かあさんが、からか
いなさると、きよは、さすがに顔かおを赤あかくしましたが、それでも、
うれしそうでありました。

「お母かあさん、おめかしをしては、いけませんねえ。」と、そのと
き、とし年ちゃんとしは、いったのです。すると、お母かあさんは、

「いいえ、きよは、よく勤めて、お父さんにも、お金を送っていますし、なかなか感心な子ですよ。自分の力でみなりをつくることは、わるいことではありません。」

また、きよに向かつては、

「よく、おつかさんの看病をしておあげなさい。」と、おつしやいました。

夜行でたつた、きよからは、着くとすぐに手紙がまいりました。母の病気は、たいしたことがありませんからご安心ください。早く帰りたいと思っています。そのときは、坊ちゃんに、弟が秋のころ、山で拾ったしばぐりをもつてまいります。」と、書いてありました。

かるたの後あとで、お母かあさんは、おしるこをこしらえてくださいました。

「きよが帰かえるころには、もうおもちが、なくなつてしましますね。」と、お姉ねえさんが、いいました。

「きよに、おしるこを食たべさせてやりたいな。」と、年としちやんが
いいました。

これをおききなさると、お母かあさんは、二人ふたりの子供こどもが、ほかほかの人ひとにもやさしいのを、さもお喜よろこびなされるように、子供こどもらの顔かおを見みていらつしやいましたが、

「きよは、田舎いなかで、おもちをたくさん食たべてきますよ。」と、お
つしやいました。

その翌よくじつ日のことです。年としちやんが、学がっこう校から帰かえつてくると、汚きたならしいふうをした女おんなひとの人が、お母かあさんと話はなしをしていました。年としちやんは、見みたことのある人ひとのような気きがしたが、思おもい出だせませんでした。

「どうして、こんな人ひとが、お母かあさんとお話はなしをしているのだろう。」と、年としちやんは、不ふ思し議ぎに考かんえました。女おんなひとの人は、お母かあさんの方ほうを見みて、

「私わたしにも、今ことし年とし十四おとこになる男この子こがあります。学がっこう校でを出でると、すぐほうこうに奉ほう公こうをさせたのですが、手て紙がみのたおとうとびに、弟おとうとはどうしていいかと、いいつてききます。」と、いいつていいました。

お母かあさんは、いいちいいちううななずずききななさされて、

「ほんとうに、感心かんしんですね。それもあなたが、そうしたりつばなお心こころがけだからです。きつといい子こにおなりですよ。」と、おつしやいました。

「ただ、子供こどもの大きくなるのをたの楽しみにしています。」

「そうですとも。」と、お母さんかあは、頭あたまをば、こくりとなさった。

「おじやまいたしました。」

「女じよちゆう中かえが帰りましたら、どんなに喜よろこぶことでしょうか。すぐ

にお礼れいに上あがらせますから。」と、お母さんかあが、おつしやると、

「いいえ、お礼れいなんかいるもんですか。」と、女おんなは、そうそうに

して、帰かえっていきました。

「お母さんかあ、いまの人ひとだれなの？」と、年としちゃんが聞ききました。

「あの人ひとですか、くず屋やさんです。」

「なにしにきたの。」

「このあいだ、きよが、弟おとうとに送おくる為替かわせのはいった手紙てがみを落おとしたといっていたでしょう。あの人ひとがごみ捨すて場ばにあつたのを拾ひろつて、とどけてくださつたのですよ。なんと正しょうじき直ちかなくず屋やさんではありませんか。」と、お母かあさんは、いわれました。

「そうだったか。」と、年としちやんは、思おもい当あたると、ため息いきをつきました。いつか、原はらっぱのごみ捨すて場ばで、紙かみくずや、菜なつ葉ばを拾ひろつていた女おんなの人ひとだ。あのととき、自分じぶんは、乞食こじきかと思おもつたが、そんなしょうじきに正ちか直ちかな感かん心しんな人ひとであつたのかと、さげすんだことが、かえつて恥はずかしくなりました。

きよが、田舎から帰ると、お母さんは、くず屋さんがとどけてくれた手紙をお渡しになりました。きよは、驚いて、

「まあ、どこにございましたか。」と、きよは、目をまるくしたのです。そして、土に汚れた自分の手紙をいただいて、封筒を開けると、中からしわくちゃになった為替券が出てまいりました。

「女のくず屋さんが、とどけてくれたのです。きつと、おまえが、紙くずや、すえぶろの灰を原っぱへ捨てるときに、いつしよにまぢがつて捨てたのです。話をきくと、そのくず屋さんは、夫に死なれてから、二人の子供を育ててきたのだそうです。貧乏していても、正直で、感心じゃありませんか。」と、お母さん

は、おつしやいました。きよも、ほんとうに、そう感^{かん}じたし、またありがたく思^{おも}いました。

「お礼^{れい}にいつていらつしやい。」

「はい、いつてまいります。」

お母^{かあ}さんが、くず屋^やさんのお家^{うち}をきいておいてくださったので、きよは、お礼^{れい}にいくのに、そう捜^{さが}して歩^{ある}かなくともよかつたのです。

きよは、電^{でん}車^{しゃ}を降^おりてから、小^{ちい}さな家^{いえ}のごちやごちやとたてこんだ、路^ろ次^じを入^{はい}つていきました。すると、くず屋^やさんの家^{いえ}はじきわかつたが、表^{おもて}の戸^とが閉^しまつていました。

「おや、働^{はたら}きに出^でかけて、お留^る守^すなんだろうか。」と、思^{おも}つたが、

ふと、わきについている、小さな窓まどを見ると、その内うちで、コトツ、コトツ、コトツと、なにかおもちやの動くうごくような音おとが、きこえました。やはり、いるのかしら、と考かんえて、

「ごめんください。」と、きよは、いいました。しかし、返事へんじがありません。もう一度ど、

「ごめんください。」といいました。

すると、子供こどもの声こえで、

「お母かあさんは、いない。」と、答こたえました。

きよは、お礼れいに持もつていった、品物しなものだけなりと置おいていこうと思おもつて、

「もし、もし、ちよつと、ここをあけてくださいな。」といいま

した。けれど、子供は、窓を開けるようすがありませんでした。

きよは、困ってしまいました。障子の破れからのぞくと、子

どもは、病気とみえて、床について、ねていました。そのまくら

もとは、片方の車のとれたタンクが、ころがっていました。

さつき、これがびつこを引きながら、動いていたのでありましよう。

きよは、しかたなく、自分で障子を開けたのです。

「お母さんは、おかせぎにいらしたの？」と聞くと、子供は、だまって、上を向きながら、うなずきました。

「ひとりで、おるすい？」

「僕、かぜをひいたので、ついていかなかったの。」と、子供は、

こた
答えました。

さびしい家のようすを見ると、火の気もない三畳の間に、子供は、独りでねているのでした。きよは、かわいそうになりました。「こんどくるときに、いいおもちゃを持ってきてあげますよ。」というと、子供は、このまったく知らぬお姉さんの顔を、不思議そうにながめていました。それでも、やさしくいわれたので、なつかしく感じたのか、さびしく笑っていました。

「奥さま、ただいま。」と、きよは、お家へ帰ると、お母さんの前で頭を下げました。そして、自分の見たことを、話したのであります。そばでこの話をきいた年ちゃんには、——いつか、雪の降った日に、くつ下をはかずに、破れたくつをはいて、車のそ

ばに立たっていた、子供こどもの姿すがたが、目めに、ありありと浮うかんだのであ
ります。そして、寒さむいのに、くつ下したもはかずにいたので、かぜを
ひいたのだろうと思おもわれました。

「お母かあさん、あのくず屋やさんがきたら、僕ぼくのいらぬおもちゃと、
絵本えほんをやつてね。」と、年としちやんがいました。

「ええ、ねている子供こどもさんに持もつていつてもらいますよ。そんな
に不自由ふじゆうをしていても、まちがったことをしない、ほんとうに感か
心しんな人ひとですものね。」と、お母かあさんは、しみじみとおっしやい
ました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「日本の子供」文昭社

1938（昭和13）年12月

初出：「お話の木」

1938（昭和13）年2月

※表題は底本では、「雪《ゆき》の降《ふ》った日《ひ》」となっています。

※初出時の表題は「雪の降った日」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年11月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雪の降った日

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>